

合の判に、あづまの人の言葉なりと見ゆ、ふるくは歌に見えずとぞ、一説に、よしは葉もとに毛なし、根深く入もの也、あしは葉もとに毛ありて、根は土よりうへをはふもの也ともいへり、

〔圓珠庵雜記〕あしをよしといふは、俊成卿の住吉社歌合を判して、末にかき給へる言に、あづまの人のことばなるよしなり、齋宮忌詞に、法師を髪長といへるやうに、あしといふがゆ、しければ、よしといひなすにや、ふるくは歌にみえざるにや、

〔頭書〕真淵云、遠江などより東の方にては、今よしとのみいへり、又難波のあしに伊勢の濱をぎとて、

此物を同じ事とよめるは、後の俗の歌にて、萬葉の意をよくまらでいへり、東歌には、さゝらをぎよしとひことかたりよらしもとよめるは、似て同じからぬをもていへれば、中々に別なる據なり、

〔書言字考節用集〕六生植、ハマナギ、濱萩

〔倭訓栞〕中編二十はまおぎ 萬葉集に、伊勢の濱萩といへり、蘆をいふなりと顯注密勘にみえたり、されど武藏風土記に濱萩と葦とを並舉たり、濱邊の萩といふ事にて、葦に雜りて生ずる物ゆへに、同集に、葦へなる萩の葉さやぎともよめり、葉のかたかたに著たるに萩多しといへり、今も

二見浦にかた葉の葦とて名物とせるあり、定家卿萬葉の歌をとりて、  
二見がたいせの濱萩まきたへの衣手かれて夢もむすばず、後拾遺集の作者侍從命婦を濱萩といふは、祭主輔親が猶子なるをもてといへり、

〔住吉社歌合〕嘉應二年十月九日

神風いせしまには、はまをぎとなづくれど、なにはわたりには、あしとのみいひ、あづまのかたには、よしといふなるがごとくに、おなじきうたなれども、人の心よりくになむある、○下

〔俚言集覽〕奈浪速の蘆は伊勢の濱萩、これは連歌の句也、物の名も所によりてかはるなり、とい